

私がめざしたITクリニック

英クリニック

診療科目

胃腸科, 乳腺科, 内科, 外科, リハビリテーション科

クラシックなたたずまいにフルデジタルシステムを備えたITクリニック

佐々木英人

英クリニック院長

はじめに—診療所の概要

英クリニックは、2006年11月に開院した(図1)。診療科目は、胃腸科、乳腺科、内科、外科、リハビリテーション科である。近年、がん患者が増加している中で当クリニックは、乳がん、肺がん、胃がん、大腸がんなどの疾患を早期発見、治療することに力を入れている。

そのために、クリニック内の検査機器は、最新鋭のデジタルX線透視装置、デジタルマンモグラフィ装置、内視鏡検査装置、超音波診断装置を備え、撮影画像はすべて画像ファイリングシステム(パナソニックAVCメディカルPlissimo Airy)に保存してすぐに参照でき、電子カルテ(ビー・エム・エルMedical Station)と連動できるフルデジタルITクリニックを実現している。

現在、常勤務医師1名、常勤事務2名、パート事務1名、常勤看護師2名で業務を行っている。

IT化のコンセプト, ねらい

新規開業する上で、明るく、落ち着いて、ゆったりできる空間をご提供することにより、患者さんが受診しやすいクリニックをコンセプトに考えた。建物も高原のロッジをイメージしており、いままでのクリニックらしくないクリニックをめざした。特に、カルテやフィルムがあるとクリニック内がどうしても煩雑に見えたり、置き場所や収納場所もスペースを確保するために、

一番快適に過ごしていただくべきところである患者さんの待合室や診察室のスペースが狭くなってしまうことを避けたかった。

そこで、クリニック内のカルテや資料、フィルムの置き場所をなくすために検査機器、システムをフルデジタル化するねらいで、下記の具体的取り組みを行った。

- (1) 検査機器はすべてデジタル対応可能にして、ネットワークまたは媒体でデータ送信できる仕組みを構築した。これによって、フィルムや廃液がなくなり、機器を設置する検査室が最小のスペースでレイアウトできた。
- (2) 検査関係のフィルムを置くスペースをなくすために、検査機器からのデータを5年分安全に保存できる画像保管サーバを設置した。
- (3) 診察用カルテは電子カルテを導入してペーパーレスで運用できる仕組みを構築した。その結果、カルテ収納戸棚が不要となり、受付奥が有効利用できている。
- (4) 患者さんが持参する紹介状、報告書も診察室の戸棚に保管すると管理作業が増え、煩雑になるため、紙類をデータ化しすべて画像保管サーバに保存する仕組みを構築した(これらの文書類は、電子カルテ内には容量が大きすぎて入らない)。
- (5) 他院や以前からの患者さんの検査データや一部デジカメで撮った画像データも、すべて画像保管サー

バに保存するようにした。

また、IT化したことで相乗効果として診療、医療事務などの効率化にもつながっている。

このようにシステムを運用して半年が過ぎ、診察面において患者さんに電子カルテや画像ファイリングシステムを見せながら、ゆっくり説明、会話する時間が増えてきている。

システム選定のポイント

システムを選定する時、一番重要視したのは検査機器や画像ファイリングシステムの画像の鮮明度やCPUの処理速度で、いろいろな機種を見て決定した。検査機器を導入するに当たり、デジタルX線透視装置、デジタルマンモグラフィ装置、内視鏡検査装置、超音波診断装置は、国際モダンホスピタルショウや各社展示会などに何度も足を運んで確認し、使用している先生方にも感想などをうかがい検討した。

また、診察室で使用する電子カルテや画像ファイリングシステムに関しては、患者さんを診察していて会話をする傍ら、操作が簡単で使いやすく、かつカルテや画像の表示スピードも重要



図1 高原のロッジをイメージ



特集1
ITクリニックをめざす
電子カルテを中心とした一歩進んだ診療環境づくり

な選択肢の1つであった。特に、画像ファイリングシステムでの画像の表示スピードは大変重要であった。何社か検討した中で、パナソニックAVCメディカルのPlissimo Airyが非常に表示が速く、かつ過去画像の参照が簡単にできることを評価した。電子カルテは診察の中で不可欠なもので、システムの信頼性やメンテナンスが優れているピー・エム・エルのMedical Stationを選定した。

導入スケジュール

新規開院する上で、1年前から検討スタートした。当クリニックはメディカルモールの1施設で、当初は建物の設計から入った。検査機器、電子カルテ、画像ファイリングシステムは、情報収集するためにホームページや雑誌などでどのようなメーカーがあり、どんな長があるか、メーカーよりカタログを取り寄せた。8か月前になり、見てみたいメーカーの製品を絞り、地域の販売会社をお願いしてデモンスト

レーションをしていただいたり、東京や大阪の展示会に積極的に見学に行った。建物の設計時点で、検査機器、電子カルテ、画像ファイリングシステムの具体的な置き場所、どのように運用するかを同時進行で検討を行った。半年前になり、院内LAN配線、電源仕様、システムメンテナンスのリモート回線などの仕様について、電子カルテ、画像ファイリングシステムメーカーを交えての建物メーカーと入念な打ち合わせをした。開院5か月前に、建築のスタート時点で検査機器、電子カルテ、画像ファイリングシステムの導入日程を決定し、開院2週間前から順次導入を行っていくスケジュールを詳細に立て、開院日から使用できるようにした。このスケジュールを立てたが、少し日数が不足してしまい、1か月前からの準備が必要であったと考えている。



まとめ
現時点での評価と今後の展望

医療機器、電子カルテ、画像ファイリ

ングシステムを導入してフルデジタル化したことは、クリニック内のスペースの有効活用もでき、限られた人員で効率良く運用でき、患者さん方にも満足していただいで大きなメリットと考えている。導入時には、操作面でいろいろなメーカーにサポートしていただいた。システムをスムーズに稼働させるために、事前トレーニングをもう少し早くからすべきであったと考えている。

今後はさらにデジタル化を進展させるためにも、マンモグラフィの読影モニタをさらに高精細化したいことと、現状では内視鏡や超音波画像をオフラインでDICOM変換しているの、ゲートウェイ機能を導入してDICOM自動変換する仕組みも検討している。また、今後健診にも力を入れていくので、画像の読影を大学病院に依頼するため遠隔読影システム導入を検討していきたいと考えている。電子カルテに関しては、音声入力できる機能も入れて、患者さんとゆっくと会話できる患者さんが受診しやすい、親しみやすいクリニックをめざしていきたいと考えている。

英クリニック
〒514-1101
三重県津市久居明神町風早 2090-1
TEL 059-259-0808
URL <http://www.hanabusa-md.jp>

佐々木英人
(ささき ひでと)
1976年三重大学医学部卒業後、77年三重大学医学部附属病院第1外科助手。86年尾鷲市立尾鷲総合病院副院長兼外科部長、91年済生会松阪総合病院外科部長、2000年三重中央医療センター外科部長、2006年に英クリニックを開院。外科専門医、消化器病専門医、消化器内視鏡専門医、マンモグラフィ読影認定医師、三重大学医学部臨床教授。

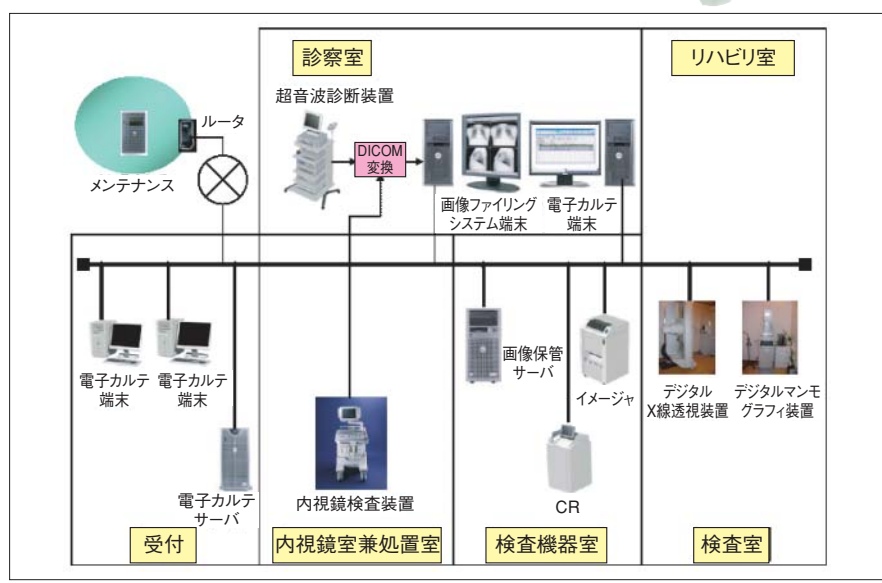


図2 英クリニックのシステム構成